

2023年6月1日(木) 晴→曇り

昨日の夕方一気に晴れた。今朝一番もすっきりと青空がひろがっていたが、少しずつ雲が出てきた。夕方には雨になる予報。今日から6月、あつという間に時間がすぎる。

－ 「解放感！」 －

ケータイを見ながら行先に迷っている人を街なかで見始めた時、“仕事の事前準備や段取りの長けた人はたぶん減っていくなあ…”と思った。

電車内の光景が下向く人ばかりになり始めた時から、工事中のビルやや現場はなるべく避けて通るようにしている。

「こんな風にじっくり自分のことを話したのは今日初めて!」と帰り際に来訪者が晴やかに言った1995年から、〈話せる〉相手や場はけっこう希少なのだと覚るようになった。同じようなことをつぶやく人が少なくなかった。

そう簡単には話さない、話せない。生活文化がそうになっているらしい。今の若い人もその度合いがもっと強くなっている様子。たぶん本人も意識しないほど、心理的なストレスがついて回っているのではないか。

もちろん大人もそう。ある人は「飛行機が離陸した時のあの解放感!」とさげんだ人もいる。海外旅行で日本を離れる瞬間にいつもそう感じるそう。あなたもそうでしょ?と同意をもとめられた。

こちらはポカンとして「…いえ、そんな感じはないですね…」と言うと拍子抜けしたような、ちょっと落胆したような、意外そうな表情をみせた。ひょっとすると、このことで距離を感じられたかもしれない。

別なある人は、旅行で訪れたアジアのある国が、“わたしの居場所はここ”と感じた。ここで生きるか…、でも、たぶんあまりに居心地が良すぎる、それはいけない。戻って生きる、それが修業になる、と考えたとか。

そんな話を聴く。相手からすれば、話せる人がいる。たぶんこれが大事。極少でも、いてこそ、ときに、「解放感!」。

2023年6月5日(月) 曇り

今日は朝から曇り空、土日が晴天だったので、ゆるせる感じ。梅雨の晴れ間で、おまけにカラッとしていて、せっせと洗濯した。明日は芒種、その次は夏至!

－ 専門以外の何か －

「フェルデンクライス」を知ったのは今から16年前だった。2007年に実施され今も続いている『プロ講師になろう塾』、その第一期の受講者の一人がフェルデンクライスをやっている人だった。

「フェルデンクライス？ 何ですかそれ？」と思わず尋ねた。独立当時「パーソナルアシスタント？ 何ですかそれ？」となんども聞き返された者が同じように聞き返していた。

その後もう一人「フェルデンクライス」をやっている人に出会った。それぞれの活動の様子を何度となく聴いた。実際に体験もしてみた。そのうち一つの考えが浮かんだ、これは～道ではないかと。

身体セルフマネジメントともいべきこのメソッドは、柔道、書道、華道とかの道に通じる、いわば身体道。そして、身体を深くみつめると、おのずと身心への観察が鋭くなる。最近会って話して、そんな印象をもった。

ある専門を深く理解して、独自の視点やワザをそなえるには、異質な知や技法が助けになると考えている。仕事上でもよく言っている。そういった意味で、心理を専門とする人は「フェルデンクライス」が案外助けになるじゃないか。

自身の専門性に磨きをかける、助けになる別な何か。これを早く見つけましょうと、仕事上でもよく話している。個人手的にはかつての脳科学・認知科学、今の「中井久夫」。

2023年6月7日(水) 曇→晴

今日は午後から晴れる予報。気温も上がるそうで、蒸し暑くなりそう。ニュースで今年の天神祭はようやく通常どおりの形で実施されるとか。そういえば祇園祭も近い。

－ 可塑性－

新しいパソコンでようやく仕事できるようになった。つつい慣れた旧パソコンを使ってしまい、アプリやデータの移行を先延ばしにしていた。買ってからもう一ヶ月以上。

新しいPCではedgeをメインのブラウザーにし、bingでチャットAIをちょっと試してみた。親戚への手紙作成、老子についての感想、さらに老子第63章についても尋ねた。

評判どおりの出来だった。仕事でも勉強でも、何にでも、これは使うようになるなあと感じた。異才のつくったAIを、凡才のわたしたちはどう使っていくか、開発者自身が規制の必要性を進言するほどのものを。

4月下旬から読み進めてきた「ある観察」は、あいだを飛ばして、最後の章を読むことにした。昨日今日のessaisでも話したように、音声にするには過酷な現実をつきつけられる。

声にだして読むのは控えても、この本のもつ意義は大きい。たぶん一番読むべき人は政治家だろうけど、彼らは避けてとおるので、市井のわたしたちが読み、知的装備をして、感性へと沁みこませ、直観の力を養っておくのがいい。

中井先生にならえば、今後、「人工知能と平和 ある観察」という視点、論点が生まそう。人間である自分自身の、人間という生き物の可塑性とか、外の力で変化しうる側面をよくよく自覚しておく必要がある。これはかなり大事なことだろうと思う、これから特に。

2023年6月9日(金) 曇

昨日の午後から降った雨は早朝にはやみ、今日は曇り空、時々薄日が差す。気温はさほど上がらず、すごしやすい。考えてみれば、まだ上旬。

－ 30年の購読歴 －

日経が購読料を上げるらしい。今日の朝刊トップに「お願い」が載っていた。診断士の勉強を始めた時に読み始めたから、もう30年以上になる。仕事の素養のためでもあるから、「お願い」に応じて基本的には購読を続けるつもり。

30年の購読で一番印象に残っているのは、何とんでも1997年11月の「山一破綻」。日経が一報を朝刊一面に載せたのは土曜日だった。診断士受験講座の講師担当曜日だった。1996年に合格した後、通っていた受験準備校から講座の講師を頼まれて、平日夜や土曜日に出講していた。

確認すると、11月22日。この土曜の朝、早めに支度をして、玄関で靴を履き、いったんドアを開けてポストから新聞をとり、バックに入れるために、半折り新聞を床にぱっと置いたとき、折れが左右に開いた。

いま思えばスローモーションのような感じ。左右に開きながら見え始めたヘッドライン。これまで日経では見たことのない、巨大な黒文字。本当に大きくて、衝撃度をあらわしていて、文字を読む前からギョツとした。

「山一破綻」。ひょっとすると「山一自主廃業」かもしれないけど、とにかく名の知れた証券会社が〈つぶれる〉という一報に、ああ…!という感じがした。あの時の感覚は今もよく覚えている。

バブル崩壊の具体的な現象がまだこれから本番かと多くの人が感じた。世の中全体が覇気にかけていた。漠然とした不安が漂っていた。ただ過ぎてみれば、それも新しい時代に入る一種の〈通過儀礼〉だったとわかる。「インターネット」が広がり始めていた時でもあった。

いまの日経に「AI」の載らない日はない。雑誌や書籍も「生成AI」が軒を連ねる。戦後100年の2045年まであと20年ほど。自分なりの〈読み〉では2025年から2030年に起こる事態や状況が、2045年の節目をどのように迎えるかの鍵を握るように思える。その節目を見ることはないだろうけど。

2023年6月12日(月) 曇⇄雨

雨が続き、湿度が高止まり。エルニーニョ現象が春にすでに発生していたとか。ラニーニャ現象がまだ残っているとのもので、さてこの梅雨から夏、台風シーズンにかけてどんな天気になるか、気がかり。

－ ヒストリー －

仕事でよく人の想いを聴く。やりたいことをどうやっていくかの相談に助言をする場面で、必ずたずねることになるのが、何故それなのか。おのずと話は過去へと開かれる。

こう書くと思い出さずにはおられない。『人生という作品』(三浦雅士)時々引用している結びの一文。

「過去は少しも決定されていないし、逆に未来はすべて決定されていると言ってもいいのだ。人間の自由はむしろ過去へと向かって開かれている。人はただ、歴史を変えるように未来を書き変えるのである。」

これは、未来が変われば過去の意味合いが変わる、また、未来は過去によって触発されると解釈すればいいと、個人的には考えている。著者の言わんとすることは別かもしれないけど。

『過去のことは物語らねばならない』という言葉もあるが、過去を語る相手を話を聴くにつれ、〈何故〉そのことをやりたいのかもわかってくるし、そのやりたいことをどうやっていくかの〈どのように〉の選択肢もみえてくる。

今日のessaisでも話したけど、何かしらその人の発露はその人のヒストリーにあって、若年期、壮年期、晩年期それぞれにふさわしいカタチで営まれる、そんなことをあらためて思った。

エッセーとヒストリー。「堀田善衛」はエッセーを「(人間を見直す)試み」ととらえていた。その人のヒストリー次第で、エッセーのレベルも決まるとも言えて、我を省みる昨日今日。

2023年6月15日(木) 曇⇄雨

湿度が高い! 気温はそれほど高くないからまだしのげる。土日はなんとか晴れそう、でも気温が高い。あーあ。

— 筆写 —

映画にCMに、最近またさかんに活躍している「岡田准一」。あまり関心はなかったけど、雑誌のインタビューを読んでからは、親しみを感じ、敬意をはらっている。

2006年7月号『Grazia』スペシャル「気になる男」のコピーを知人からもらって、読書家なのを知った。お母さんから薫陶をうけたようで、小学生の段階で自立心に芽生えたそう。

「本が人生の教科書だった」というほど色々な本をたくさん読んできてようで、インタビューに応える話の内容も、読ませる。感心する箇所が多い。そして、そうだったの?!と共感したのが「筆写」。

「自分に響いた言葉とか、好きな言葉」を全部ノートに書いたそう。「星野富弘」の詩画集から、『星の王子さま』、孔子の言葉など等。今も一冊だけ残っているらしい。

個人の習慣というものはあまり聞く機会がない。特に筆写は少数派だろうから、こうして同じ習慣の人を知ると親しみを感じる。別のインタビューで彼は、「仙人になりたい」と言っていたとか。わかる気がする。

現代の仙人だったような「中井久夫」も筆写し、さらに、「しばしば好みの文章の暗唱を好む」と著書に書いていた。

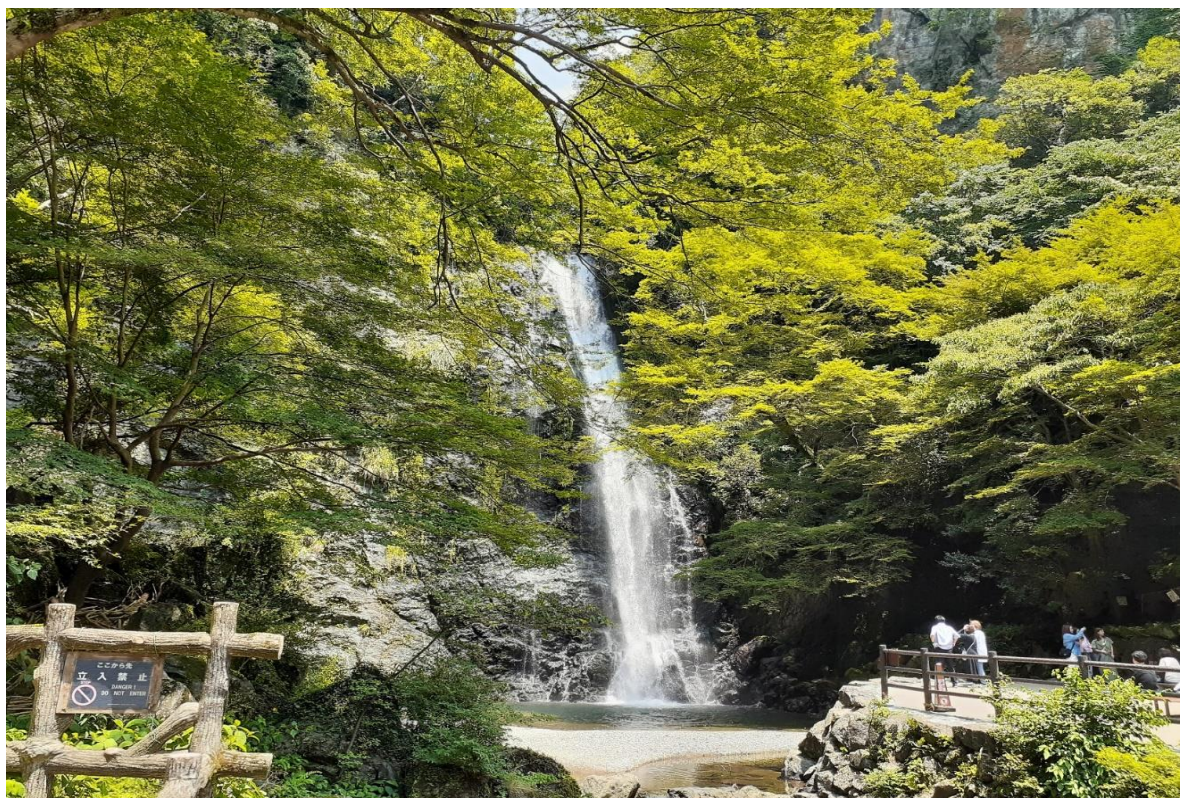


自分に響いた言葉や文章を、手でなぞりながら頭と感覚に働きかけ、時には声にだして読んで、耳からもとりいれる。時間にすればわずかだけど、身体から精神へとつながって、糧の小さなエッセンスとして加わる。

写経というのがあるぐらいだから、筆写もなかなか侮れない。

2023年6月19日（月）

箕面散歩、遅めの大型連休、早めの夏休み？





2023年6月21日(水) 曇

一日曇りの予報だけど、陽がさしている。これなら「晴れ」といってよさそう。風があるから、しのぎやすい。今日は夏至。

－ 文書作成 －

ときどき文書を見てほしいと頼まれる。外部に提出する企画書や広報物などが多い。当事者の想いが強ければつよくほど、文書は空白がないほど盛りだくさん。気持ちはよくわかる。

文書は頭の中の考えなどの目にみえないものを目にみえる形にするわけだから、内容と見え方との一環性がともなってこそ伝わる。だから一つ指摘すると、別のところも連なって、微妙にかえる必要もあったりして、指摘しだすとキリがない。

代わりにつくった方が早い気がするけど、それでは本人にとって意味がない。文章表現も文書の体裁も、「慣れ」の問題だから、一定の数をこなしてブラッシュアップできる。そう励ます。

初めのうちは何度もやり直して、しだい、“何やってるんだろう…”としたりするが、それも一つの時間投資。ある程度の時間を使っていくと、体が覚えるから、追ってラク。

ただこれからは生成AIがあるから、そういった手間は省くようになるかもしれない。AIもパーソナル化されていけようし、同じAIを使っても、習熟度や習熟領域に違いが出てきて、その差がクローズアップされそう。

文書の下書きはAI利用が普通になり、それをチェックするのが人間の大事な役目ということになるか。でも、一般的にはたぶん面倒になって、チェックを飛ばすのも多くなる…。

わかっているけど、ついつい、というのが人間の常。そういえば、広告デザイン会社の社長が言っていた、大企業の企業内デザイナーは今後充実させていくはず、と。

2分で1000のデザインサンプルと出すというAI。その中から適切なものを拾い上げ、自社のコンセプトに合致させていけるものを目利きする人間のデザイナー、プロデューサーの存在が重要。

どの次元で仕事するか、これからけっこう意味をもってきそうな問い。

2023年6月23日(金) 曇

曇り空、ときどき薄日。風があって、気温もさほど高くなく、まずまず過ごしやすい。これも束の間と思うけど。

－ 4、10、20% －

10年ほど前に知人から、「宇宙の物質でわかっているものは4、5%しかないらしい」と聞いた時、“うん？その割合は…”、起業して10年元気で残っている事業所の割合と同じ。

創業から10年続いた企業は、統計として10%だけど、その中身は、なんとか10年残った事業所半分、これから上り調子半分、という差がいわれていた。

社会生活が長くなりにつれ、妙な一致、と思えるようなことが出てくる。80-20の法則の問題点は指摘され、単なる経験則というけれど、それも人間が積み上げた暗黙知のような…。

例えばある独創的なモノ・サービスを受容できるのは20%程度で、実際それに対価を払う人は、さらにその20%、全体の4%程度だと考えるし、同じように言う人もいる。

6年前に読んだ本に、立方体を思い浮かべる調査で、「ふ、つうの透視図を描く人80%、そこに影や色を加える人10%、まったく図形が思い浮かばず数字や面・積を考える人10%」。

他の本には、著名な研究所などで、創造性をひきだすため、「技術者は勤務時間の20%を本業以外の使うことを認めている」。別な本には、「プロバガンダに抗することができる人10%」、というのもあった。

きわめつけは最近読んだ本の、「敵に向かって発砲する兵士（米軍）の率は南北戦争以来、第2次世界大戦に至るまでほぼ一定、15-20%。他国軍隊でも同じようなもの」。その15-20%のうち、「半分は強い市民的義務感の持ち主、残りは…」、書くのは控えよう。

4%、10%、20%。この割合に何か普遍的なものを感じる。人間社会の形成や営みに組み込まれた永遠の法則とでもいおうか…。

2023年6月30日（金）曇

さすがにクーラーをつけた。昨日の夕方から夜にかけて雨が降りそうで降らなかった。だからか、とにかく蒸し暑い。暑さは9月まで続きそうだし、とにかく体調管理に気をつけよう。

— 『考える葦』 —

今日のessaisでちょっと話した「抽象度の高いテーマ」。大学予備校の先生をしている知人も、新入社員研修の講師をしている知人からも、「最近の学生はちょっと抽象度が高いと理解できませんから」。

そうになっているのは、直接的にも間接的にも、ある程度観察できている。電車の中や街ゆく人たちの様子、ニュースなどを見聞きすると、“当然そうなるだろうなあ…”と思える。

全てがそうではないのは当然として、個人的に関心をもつのは、抽象度の高いテーマを扱おうとした時の思考の働きや感覚はどういったものかということ。

例えば、個人的に、数式がいっぱい書かれた本をみると、まったくついていけない、わからないという感じになる。数式の解説文の中にわからない専門用語があると、数式も解説文も、何を説明してくれているのか、理解できない。これと同じかしら。

もし新入社員研修で『信頼の構造』を読んで800字で自分の考えをまとめる課題を出したら、どのぐらいの人が実際に自分で読んで、自分でまとめることができるだろう。

生成AIを使えば簡単に課題は提出できるから、この課題自体をバカバカしいと思う人もいるはず。たぶんそのうち大半がそう思うようになる？ 『人間は考える葦である』という言葉をつい、思い出した。